

『源氏物語』における音楽——自然との関わりについて——

西 口 あ や

一、問題の所在

『源氏物語』の作中には、樂の音を奏でる場面が多く見られる。先行研究において、これらの音楽の描写は、登場人物の心情や心理を表すものであると論じられてきた。そして、それらには、自然が、時には音楽の背景として、時にはユニゾンする音として、音楽と共存するものとして描かれている。

東洋音楽と自然の関係について、張源祥氏は、音楽に自然音を取り混ぜられていることを、「自然と人間、自然と芸術が対立せず、むしろ調和していること、自然と人間の合一を語るものであると云えよう」とし、角田忠信氏は、「日本音楽では歌と樂器音と自然界にある鳥や虫の音とが対立することなく、美しく調和することが説明できる」と論じている。

『源氏物語』における音楽と自然の関係については、原正幸氏は、「音楽が自然音と共通のレヴェルで捉えられており、音楽と自然音が互いに他を排除し合うことなく共存し、かつ響和する、響き合うものとして描かれている」、『源氏物語』の中で描かれているような、音楽と自然音

の響和は、音楽が日常言語と重ね合わされる以前の、音楽の〈本来の姿〉を暗示していると私には思われます」と述べ、井上正氏は、「自然と人情との融和の反映」であり、「和歌の美意識と同質のものを感ぜさせる」としている。

これらの先行研究を踏まえた上で、音楽と自然という二つの要素を取り合わせて描写する方法を、表現方法のひとつとして、作者がいかに『源氏物語』に取り入れているかを確認する。そして、樂の音と自然音の関係についても考察し、そこから浮かび上がってくる、『源氏物語』における音楽と自然の在り方について探っていくことが、小論の目的である。

二、音楽と自然について

まずは、音楽と自然について、『源氏物語』でどのように語られているのかを確認していく。

『源氏物語』が大きな影響を受けている『うつほ物語』においても、四季の自然の景物が持つあはれを琴の演奏に引き添えることの重要

性が、次のように述べられている。

(1) 春は、霞、ほのかなる鶯の声、花の匂ひを思ひやり、夏の始め、深き夜の時鳥の声、暁の空の気色、林の中を思ひやり、秋の時雨、夜明らかなる月、思ひ思ひの虫の声、風の音、色々の紅葉の枝を別る折の気色を思ひ、冬の空、定めなき雲、鳥・獣の気色、朝の雪の庭を眺め、高き山の頂を思ひやり、凍みたる池の下の水をあはれば、深き心・高き思ひも、もろもろのことを思ひ合はせ、世の中の、すべて、千種にありと見ゆる物の、おぼゆる物、また、時に従ひつづ、色衰へ、久しくなり、また、むなしくなりぬる物を心に思ひ続けて、『琴の音に弾き添へむ』と、思ひ同じくして弾き侍ればこそ、琴の音、思ひ思ひに従ひて響き、よろづの折には合ひ侍れ。遊ばすやうに、ただ弾きにやは弾くものならむ。

〔うつほ物語 全 改訂版〕・八四九頁

(1)は、仲忠が述べた琴の演奏法で、演奏をする際には、四季それぞれに折に合うものに思いを寄せて、思いを同じくして演奏をすることが重要なのだと述べられている。この傍線部「よろづの折には合ひ侍れ」という考え方が、『源氏物語』にも引き継がれていることを、次の資料から伺うことができる。光源氏が女三の宮に琴の琴を教授する場面と、光源氏の手ほどきを受けた女三の宮の演奏が評価される場面である。

(2) 調べことなる手二つ三つ、おもしろき大曲どもの、四季につけて変るべき響き、空の寒き温さを調へ出でて、やむことなかるべき手の

かぎりぞ、とりたてて教へきこえたまふに、……

〔若菜下〕の巻・一八一頁

(3) 春秋よろづの物に通へる調べにて、通はしわたしつづ弾きたまふ心しらひ、教へきこえたまふさま違へず、いとよくわきまへたまへるを、いとうつくしく面だたしく思ひきこえたまふ。

〔若菜下〕の巻・二〇一頁

光源氏は、(2)において、女三の宮に、傍線部にあるように、四季の移り変わりによって響きを変え、気候の寒暖に合わせて音色を整える格別の手の限りを伝授している。その結果、(3)の、六条の院の女樂での女三の宮の演奏は、傍線部にあるような、春秋どの季節のものにも通う調子で、あれからこれへとふさわしい音色に弾きこなす心配りをしたものと なっており、光源氏が(2)で伝授した通りに演奏していることが分かる。そして、光源氏は、女三の宮の演奏を、「いとよくわきまへたまへる」と評価し、「いとうつくしく面だたしく思ひきこえたまふ」のである。ここからも、物語が、いかに音楽と自然の繋がりを重要視しているかが 覗えるであろう。

また、『源氏物語』において、音楽と自然が同列に扱われている場面がある。

(4) 空の色、物の音も、春の調べ、響きはいとことにまさりけるけぢめを、人々思しわくらむかし。夜もすがら遊び明かしたまふ。返り声に喜春樂立ちそひて、兵部卿宮、青柳折り返しおもしろくうたひたまふ。主の大臣も言加へたまふ。

〔胡蝶〕の巻・一六八〜一六九頁

(5) 琴笛ことぶえの調べ、花鳥はなとりの色をも音ねをも、時に従ひてこそ、人の耳もとまるものなれ。
〔竹河〕の巻・七八頁

(4)では、春の双調を評する際、傍線部のように、「空の色」(自然)と「物の音」(音楽)が、判断基準として同列に扱われている。春の調べの響きは、楽の音と自然の素晴らしさが合わさったからこそ、「いとことまざりける」という評価になり得たのだ。ここからも、当時の人々が持ち合わせていた、音楽と自然の融和について好ましく思う考えを、語り手が表現していることが読み取れる。

(5)には、語り手の音楽に対する意識が、よく表れているように思われる。これは、「薄雲」の巻における春秋優劣論の中で語られた、「いづれも時々につけて見たまふに、目移りてえこそ花鳥はなとりの色をも音ねをもわきまへはべらね」(四六二頁)に照応する。「薄雲」の巻では、音楽については触れられていないのであるが、この「竹河」の巻では、傍線部にあるように、「琴笛ことぶえの調べ」と花鳥の色と音が並列されている。この「時節」とは、即ち「季節」のことであり、楽の音と、花の色や鳥の声は、その季節に合ったものであるからこそ、人の感興を呼び起こすのだという。(1)では、琴についてのみ言及されていたが、ここでは笛についても述べられており、音楽と自然の景物は、四季という大きな自然に相応しいものであることが重要なのだと、語り手は、光源氏を通して述べている。このように、「源氏物語」において、音楽と自然は密接に関係しており、二つが関わり合うことで、音楽の質はより高められるとされていたのである。

三、楽の音と混成する自然音

第二章を踏まえた上で、今度は、『源氏物語』に見られる、楽の音と自然音の混成について考察する。『源氏物語』において、楽の音と自然音を取り混ぜられて描かれている、または、それについて述べられている例は、二二例ある。多くあるが、ひとつずつ簡単に確認していきたい。

風(松風)

風の中で最も多く見られたのが、松風との混成で、四例ある。

(1) 木高き紅葉もみぢの蔭かげに、四十人の垣代かいらいひ知らず吹きたてたる物の音ねどもにあひたる松風しょうふう、まことの深山みやまおろしと聞こえて吹きまよひ、色々に散りかふ木この葉はの中より、青海波せいがいはのかかやき出いでたるさま、いと恐ろしきまで見ゆ。
〔紅葉賀〕の巻・三三四頁

(1)は、朱雀院の行幸の場面である。傍線部にあるように、ここでは、松風と笛の音が混成している。「まことの深山おろしと聞こえ」ていることから、二つの音色が完全に混じり合っていることが覗える。そのさまは、恐ろしいまでに美しいとされている。

(2) ……なかなかもの思ひつづけられて、棄すてし家居いえも恋しうつれづれなれば、かの御形見みかたの琴かを掻かき鳴らす。をりのいみじう忍びがたければ、人離れたる方かたにうちとけてすこし弾ひくに、松風はしたなく響

きあひたり。尼君もの悲しげにて寄り臥したまへるに、起きあがりて、

身をかへてひとりかへれる山里に聞きしに似たる松風ぞ吹く

御方、

ふる里に見し世の友を恋ひわびてさへづることを誰かわくらん

〔松風〕の巻・四〇七〜四〇八頁

(2)は、明石から大堰の邸に移り住んだ明石の君が、故郷を離れた寂しさに物思いをしながら、光源氏に託された琴の音を弾いている場面である。ここでは、傍線部にあるように、松風と琴の音が混成するさまが描かれている。

明石の君が弾く琴の音を聞きつけたかのように松風が吹いてきたことが「はしたなし」と書かれているが、「はしたなし」であるということなどは、松風と琴の音が混成することに否定的であるということなのだろうか。波線部の母尼の歌をしてみる。母尼の歌は、昔とは異なる尼の身となり、一人帰ってきたこの山里には、明石の浦で聞いたものと同じような松風が吹いている」という意である。明石の君の母は、夫と離れ、娘と共に大堰の邸へと戻ってきた。もの悲しげに寄り臥していた母尼は、明石の君と同じく、明石の地や、そこにいる夫へ思いを馳せていたに違いない。そんな母尼の姿を見ていた明石の君は、自分の琴の音の音を聞きつけたかのように吹いた松風の音が、母尼の抱いていた故郷への郷愁を強めてしまうことを恐れたのだろう。従って、この「はしたなし」は、「不似合い」ではなく「きまりが悪い」の意であり、語り手は、松風と琴の音が混成すること自体を否定しているわけではないことが分かる。また、このように郷愁を誘う音として描かれていることから、松

風と琴の音の混成は、聞き苦しくないものとされていると考えられる。

(3) ……琴掻き鳴らしたまへる、いとあはれに心すこし。かたへは、峰

の松風のもてはやすなるべし。いとたどたどしげにおぼめきたまひて、心ばへある手ひとつばかりにてやめたまひつ。

〔橋姫〕の巻・一五七頁

(3)は、八の宮が、薫に勧められて琴の音を弾く場面である。ここでは、松風と琴の音の混成が見られる。八の宮は、たどたどしく、思い出せぬといったように弾いているが、彼は楽才に恵まれた人物である。傍線部で、奏でる琴の音がそのように聞こえるのは、それを松風が引き立たせているからであろう、と推測されている。

(4) ……盤渉調をいとをかしう吹きて、「いづら。さらば」とのたまふ。

むすめ尼君、これもよきほどのすき者にて、……「いでや、これはひがことになりてはべらむ」と言ひながら弾く。今様は、をさをさなべての人の今は好まずなりゆくものなれば、なかなかめづらしくあはれに聞こゆ。松風もいとよくもてはやす。吹きあはせたる笛の音に、月もかよひて澄める心地すれば、いよいよめでられて、宵まどひもせず起きるなり。

〔手習〕の巻・三一九〜三二〇頁

(4)は、小野の庵で、妹尼が琴の音を弾く場面である。こちらも(3)と同じく、松風と琴の音が混成しており、傍線部に「もてはやす」とあることも共通している。

松風と琴の琴が取り合わされる背景には、和歌の修辞があり、代表的な歌として、斎宮の女御の「琴の音に峰の松風通ふらしいづれのおより調べそめけん」〔拾遺和歌集〕巻第八・雑上四五二が挙げられ、この歌の詞書「野宮に斎宮の庚申し侍けるに、松風入ニ夜琴一といふ題を詠み侍ける」に見られる、「松風入夜琴」は、唐の詩人・李嶠の句から取られている。この歌の影響もあり、古人には、琴の音と松風の組み合わせが、広く愛されていたという。

風(川風)

川風との混成は、二例ある。

(5) ……おのおの絶句など作りわたして、月はなやかにさし出づるほどに、大御遊びはじまりて、いといまめかし。弾物、琵琶、和琴ばかり、笛ども、上手のかぎりして、をりにあひたる調子吹きたつるほど、川風吹きあはせておもしろきに、月高くさし上がり、よろづのこと澄める夜のやや更くるほどに、殿上人四五人ばかり連れて参れり。

〔松風〕の巻・四一八〜四一九頁

(5)は、桂の院で管絃の遊びが催されている場面である。傍線部にあるように、時候に相応しい調子を吹き立てている折から、ちょうど音を合わせるように川風が吹き、感興もひとしおとなっている。ここでは、弾き物は、琵琶や和琴で、笛は、波線部に「笛の演奏者は、上手な者のみで」と記されており、絃楽器よりも管楽器の方が、音も際立っていたであろうことが推測される。

(6) げに川風も心わかぬさまに吹き通ふ物の音どもおもしろく遊びたまふ。

〔椎本〕の巻・一七五頁

(6)は、宇治で管絃の遊びが行われている場面である。傍線部にあるとおり、管絃の遊びの楽の音を、川風が運んでいく様子が描かれている。川風が吹き運ぶ音楽は、「おもしろく」と好意的に評されている。

風(山風)

山風との混成は、二例ある。

(7) 日やうやうくだりて、楽の舟ども漕ぎまひて、調子ども奏するほどの、山風の響きおもしろく吹きあはせたるに、冠者の君は、かう苦しき道ならでもまじらひ遊びぬべきものをと世の中恨めしうおぼえたまひけり。

〔少女〕の巻・七〇〜七二頁

(7)は、朱雀院の行幸の場面である。傍線部にあるように、笛が奏でる調子合わせの短い曲に、山風が混成している。その響きは、「おもしろく」と評されている。

(8) ……これに事みなさめて帰りたまふほども、山おろし吹きてね、聞こえ来る笛の音いとをかしう聞こえて、起き明かしたる。

〔手習〕の巻・三二二頁

(8)は、母尼の目に余る言動に、中将が興ざめて帰る道すがらの場面である。傍線部にあるように、中将が吹く笛の音を、山おろし、つまり山風が運んでいるさまが描かれている。その音色は、「いとをかし」とされ、それを聴いた人々が、夜明けまで起きているほどのものであった。

風(木枯らし)

木枯らしとの混成は、一例ある。

(9) 女 木枯こがらしに吹きあはすめる笛の音をひきとどむべきことの葉ぞなき
〔帚木〕の巻・七九頁

(9)は、「雨夜の品定め」における、左馬頭の体験談に登場する、浮気な女が詠んだ歌である。〈木枯らしの音に合わせられるような笛の音を引き止められるような琴はございませぬ〉というもので、相手の笛の音を賞賛する意があることから、木枯らしの音と琴の音の混成をよしとする当時の考えが窺える。

風

種類を限定しない風との混成は、二例ある。

(10) ……わざともなく掻きなしたまひたるすが掻きのほど、いひ知らずおもしろく聞こゆ。……しほしも弾きたまはなむ、聞きたることもや、と心もとなきに、この御ことによりぞ、近くゐざり寄りて、玉鬘

「いかなる風の吹き添ひて、かくは響きはべるぞとよ」とてうち傾かたむきたまへるさま、灯影ひかげにいとつつくしげなり。

〔常夏〕の巻・一三三頁

(10)の場面では、光源氏が弾く和琴に興味を持つ玉鬘の姿が描かれている。「いひ知らずおもしろく」聞こえる光源氏の和琴の音について、玉鬘は、傍線部にあるように、どんな風の力が吹き加わったらこうも美しく響くのでしょうか、と不思議そうにしている。前出の琴の音と松風の歌を基にしているものと考えられる。

(11) 舟ふねにて上り下り、おもしろく遊びたまふも聞こゆ。ほのぼのありさま見ゆるを、そなたに立ち出でて、若き人々見たてまつる。正身まうじみ

御ありさまはそれと見わかねども、紅葉を葺きたる舟の飾りの錦にしきと見ゆるに、声々吹き出づる物の音ども、風につきておどろおどろしきまでおぼゆ。
〔総角〕の巻・二九三頁

(11)は、宇治の紅葉狩りで催された管絃の遊びの場面である。傍線部にあるように、笛の音が風に乗って聞こえており、それは、「おどろおどろしきまでおぼゆ」と評されている。管絃の遊びが、波線部において、おもしろく遊びをなさるのも聞こえてくる、と好意的に受けとられていることから、この「おどろおどろし」は、「不気味で恐ろしい」ではなく、「仰々しい」の意だと考えられる。

風(松風+浜風)

波風と松風という、二つの風との混成は、一例ある。

(12) 十月中なつの十日なれば、神の斎垣いさまにはふ葛も色変わりて、松の下紅葉したもみぢなど、音ねにのみ秋を聞かぬ顔なり。ことごとしき高麗こうらい、唐土たうどの楽がくよりも、**A**東遊あづまゆの耳馴なれたるは、なつかしくおもしろく、波風の声に響きあひて、**B**さる木高こたかき松風に吹きたてたる笛の音も、外ほかにて聞く調べには変りて身にしみ、琴ことにうち合はせたる拍子ひょうしも、鼓つづみを離れてととのへとりたる方、おどろおどろしからぬも、なまめかしくすごうおもしろく、所がらはまして聞こえけり。

〔「若菜下」の巻・一七一頁〕

(12)は、住吉詣の場面である。傍線部A・Bにあるように、東遊びの耳馴れた音色が、波風の音に響き合せて、笛の音も、木高い松を鳴らす風の音に合わせて吹き立てられている。場所柄故か、住吉には波風と松風が響き、そこで演奏される東遊びの楽の音が、それらの風の音と混ざり合うことで、その演奏は、「所がらはまして聞こえけり」と評価されたのだ。

風(松風)十波の音

松風と波の音との混成は、一例ある。

(13) 広陵ひろらうといふ手てをあるかぎり弾ひき澄すましたまへるに、かの岡辺おかべの家も、松の響き波の音にあひて、心ばせある若人は身にしみて思ふべかめり。何とも聞きわくまじきこのもかものしはふる人どもも、すず

ろはしくて浜風をひき歩あく。

〔「明石」の巻・二四〇頁〕

(13)は、初夏の月夜に、光源氏が琴きんを弾く場面である。傍線部にあるように、ただでさえ素晴らしい光源氏の演奏に、松風と波の音が混ざり合っている。それは、何の音とも聞き分けられぬ年寄りも、浜風に吹かれてそぞろ歩きをするほどのものであった。

風(松風)十虫の音

松風と虫の音との混成は、一例ある。

(14) 秋の花みなおとろへつつ、浅茅あさぢが原もかれがれなる虫の音ねに、松風すごく吹きあはせて、そのこととも聞きわかれぬほどに、物の音ねども絶え絶え聞こえたる、いと艶えんなり。〔「賢木」の巻・八五頁〕

(14)は、光源氏が、野辺で楽の音を聞く場面である。松風のみに関して、「すごとし」「つまりぞ」とした感じであると書かれている。しかし、そこに、傍線部のように、囁れた虫の音と、何の曲とも聞き分けられぬ楽の音が混ざり合うことで、それは、「いと艶なり」という評価に変わっている。

川の音

川の音との混成は、二例ある。

(15) さすがに物の音めづる阿闍梨にて、「げに、はた、この姫君たちの

琴弾き合はせて遊びたまへる、川波に競ひて聞こえはべるは、いと
おもしろく、極楽思ひやられはべるや」と古代にめづれば、……

〔橋姫〕の巻・二一九頁

(16) は、阿闍梨による、八の宮の姫君たちの演奏の評価である。傍線部
にあるように、姫君たちの奏でる琵琶と箏の琴の音が川音に競って聞こ
えてくることは、「いとおもしろく、極楽思ひやられはべるや」と述べ
られている。

(16) 夕つ方ぞ御琴など召して遊びたまふ。例の、かう世離れたる所は、

水の音もてはやして物の音澄みまざる心地して、かの聖の宮にも、
たださし渡るほどなれば、追風に吹き来る響きを聞きたまふに昔の
こと思し出でられて、「笛をいとをかしうも吹きとほしたなるかな。
誰ならん。……かやうの遊びなどもせで、あるにもあらで過ぐし来
にける年月の、さすがに多く数へらるるこそかひなけれ」などのた
まふついでにも、……

〔権本〕の巻・一七一頁

(16) は、宇治に中宿りした薫らが催した管絃の遊びの音色を、八の宮が
聞く場面である。傍線部にあるとおり、追い風に運ばれた楽の音が、水
の音（川音）によって引き立てられ、八の宮へと届く。八の宮は笛の音
のみ聞き惚れているが、これは笛の名手である薫の紡ぐ音の素晴らし
さ故にそうだったままで、波線部に書かれている通り、演奏されている
のは笛だけではない。川の音と混成しているのは、ひとつの楽器ではな
く、その時管絃の遊びで使用されていた様々な楽器であるといえるだろ

う。

波の音

波の音との混成は、一例ある。

(17) ……君は、「このごろの波の音にかの物の音を聞かばや。さらずは

かひなくこそ」など常はのたまふ。

〔明石〕の巻・二五四頁

(17) は、光源氏が明石の入道に、娘の明石の君への手引きを促す場面で、
季節は秋である。光源氏は前半では、秋は浜風が身にしみ、独り寝が心
底もの寂しい、と思っているが、後半、明石の入道に対しては、傍線部
にあるように、こんなよい時候（秋）には、近頃の波の音に合わせた明
石の君の琴の音が聞きたい、と述べている。後半の明石の入道への発言
は、音楽にかこつけて、明石の君との対面を望む意図が大きい。しかし、
風流人として名高い光源氏が、いくら女性を思慕する気持ちからとはい
え、自身の美意識から外れたことを口にするにはあるまい。つまり、
光源氏は、秋に波の音と綯い交ぜになった楽の音を聴くことを、よしと
していたと思われる。

鳥の音

鳥の声との混成は、三例ある。

(18) 雀兵衛御宮
いにしへを吹き伝へたる笛竹にさへずる鳥の音さへ変らぬ

〔少女〕の巻・七三頁

(18)は、朱雀院の行幸で詠まれた冷泉帝の歌である。桐壺院の聖代の音色を吹き伝える春鶯囀の調べに、傍線部にあるように、囀り合わせる鶯の音まで昔と変わらないと詠む。春鶯囀という曲名に準えて、鶯の音を詠み込んでいるのであるが、当代と聖代を讃える歌に、鳥の声と楽の音の混成が歌われていることに注意したい。

(19) 鶯のうらかなる音に、鳥の楽はなやかに聞きわたされて、池の水鳥もそこはかとなく囀りわたるに、急になりはつるほど、飽かずおもしろし。
〔胡蝶〕の巻・一七二―一七三頁

(19)は、秋好中宮の御読経で、鳥の楽が披露された場面である。傍線部でも、(18)と同じように、曲名に合わせて、鶯の音と楽の音が混成するさまが描かれており、それは「飽かずおもしろし」と評価されている。

(20) 百千鳥の囀りも笛の音に劣らぬ心地して、ものあはれもおもしろさも残らぬほどに、陵王の舞ひて急になるほどの末つ方の楽、はなやかにぎははしく聞こゆるに、皆人の脱ぎかけたる物のいろいろなども、ものをりからにをかしうのみ見ゆ。

〔御法〕の巻・四九七―四九八頁

(20)は、紫の上が主催した法会で、陵王の舞が披露された場面である。

傍線部で、笛の音に劣らぬような「百千鳥」、つまり多くの鳥の声がし、そんな中、陵王の舞が佳境を迎える。その楽の音は「はなやかにぎははしく聞こゆる」とされ、それを含む情景は、「をかしうのみ見ゆ」と賛美されている。

はしく聞こゆる」とされ、それを含む情景は、「をかしうのみ見ゆ」と賛美されている。

虫の音

虫の音は、二例ある。

(21) ……「秋の夜の月影涼しきほど、いと奥深くはあらで、虫の声に掻き鳴らし合はせるほど、け近く今めかしき物の音なり。……」

〔常夏〕の巻・一三〇頁

(21)は、和琴について、光源氏が玉鬘に語っている場面である。これは和琴の音色自体の美しさを説明している所が大きい、あえて、そこに傍線部にあるような虫の音を絡めているということは、光源氏が、虫の音には和琴の音をよりいっそう優美な響きにする働きがある、と考えていたのではあるまいか。虫の音と和琴の音の混成については、「け近く今めかしき」と述べられている。

(22) ……「心もとなしや、春の朧月夜よ。秋のあはれ、はた、かうやうなる物の音に、虫の声よりあはせたる、ただならず、こよなく響きそふ心地すかし」とのたまへば、……

〔若菜下〕の巻・一九四頁

(22)は、光源氏が、夕霧と共に音楽論を交わしていた際の言葉である。

ここでも、光源氏は、秋の風情というものは、傍線部にあるように、音

樂の音色に、虫の声がない交ぜになって聞こえてくるものであるとし、それについては、「ただならず、こよなく響きそふ心地すかし」と、虫の音と樂の音の混成を賛美している。

以上、二二例を考察した結果、風の中でも、松風の四例は、笛が含まれるであろう一例(①)を除いて、すべて絃楽器と混成されており、その他の川風・山風・浜風・木枯らし・種類を限定しない風の計七例は、和琴との混成について書かれた一例(⑩)を除いて、すべて管楽器と混成されていることが分かった。

松風は松林に打ち付ける風であり、風の音だけではなく、そこには、松の葉と葉がぶつかる独特の葉音も発生しているものと思われる。「明石」の巻でも、明石の入道が、自身の娘の箏の琴の音について「松風を聞きわたしはべるにやあらん」(二四三頁)と述べていることから、松風の音は、絃楽器に近いものであると推測できよう。

それに対して、川風・山風・浜風は、音の一点のみで考えれば、通常の風と相違ないだろう。従って、人の息、つまり気流によって音を出す笛は、後者の、純粹な風音に近い風の方が、相性がよいものと思われる。波の音・川の音・鳥の音・虫の音との混成に管楽器が少なく、絃楽器に集中しているのも、それと同じ理由からだと考えられることはできないだろう。

そして、挙げた二二例は、すべて自然の音との混成をよしとしている。このことから分かるように、『源氏物語』において、自然を引き添えた樂の音に美を見出されていたことが、これらの例からも読み取ることができるのである。

また、この二二例を、「樂の音が主体で、それに自然の音が合わせて

いるもの」、「自然の音が主体で、それに樂の音が合わせているもの」、「対等関係にあるもの」に分類すると、「樂の音が主体で、それに自然の音が合わせているもの」は一〇例(①・②・③・④・⑤・⑦・⑩・⑬・⑭・⑮)、 「自然の音が主体で、それに樂の音が合わせているもの」は六例(⑨・⑪・⑫傍線部B・⑬・⑯・⑰)、 「対等関係にあるもの」は三例(⑫傍線部A・⑮・⑲)、 判別不可なものが四例(⑥・⑧・⑱・⑳)という結果になった。

第一章で挙げた先行研究でも、音楽と自然は調和する関係にあることが述べられており、確かに、これらの音が響き合うことは、調和に他ならない。しかし、この結果を見る限り、音楽が優位に立っている例が圧倒的に多く、音楽と自然の関係については、対等であるとは言いがたい。『源氏物語』には、このように、自然の音が樂の音に添うさまが多く描かれており、ここから、『源氏物語』の音楽には、演奏を通して、自然を手中に収めようとするという考えがあると考えられはしないだろうか。

五、結論

『源氏物語』は、『うつほ物語』の音楽・自然観を引き継いでおり、音楽と自然が融和することをよしとしている場面が多く見られる。こうした描写を読むことで、当時、音楽と自然の取り合わせに美を見出していた読者は、描かれた音を想像し、感性や想像力を、大いに刺激されたのであろう。自然の描写も、音楽の描写も、ともに登場人物の心情や心理を表すものであるという指摘は、多くの先行研究でなされている。音楽と自然を取り混ぜた描写には、そうした効果だけでなく、作品の外にいる読者の感覚に訴えて、その場面に立体的な広がりを与え、感動を付与

する効果もあるように思われる。

また、楽の音と自然音の混成については、一見すると、音楽と自然が対等に調和しているように感じられるが、その関係は対等ではなく、音楽が優位に立つ場合が多いことが判明した。光源氏は、春夏秋冬を邸の内に閉じ込めた、六条の院を造営しているが、この行為は、自然を人間の力で領有しようとするものなのではあるまいか。しかし、その六条の院は、結果、崩壊している。これは、光源氏の失墜を表すと同時に、人間が自然を領有し得ないことを示そうとするものだと考える。

そして、それは、物語内の音楽と自然の関係においても、同様であろう。自然音と心地よく響き合う楽の音は、自然音に似通ったものであり、それをよしとしていることから、語り手は、人間の手を遠く離れた自然を敬畏していると推測される。自然を人間の手中に収めたい、自然に近付きたいという願いを抱きながらも、それが容易には叶わないことも、語り手は理解しているのである。それでも、自然との融和を希求するこの行為は、自我を超えた、自然という生命の源に繋がろうとする試みであるともいえ、それこそが、人間の生に真摯に向き合い続けた『源氏物語』が描く、音楽の形だといえるのではあるまいか。

注

- (1) 張源祥氏「東洋音楽の素材・構成・表現」(『人文論究』四号・関西学院大学・昭和十九年)。
- (2) 角田忠信氏「東西の自然音需要メカニズムの差・言語と音楽」(『日本耳鼻咽喉科学会会報』七八号・社団法人日本耳鼻咽喉科学会・昭和五〇年)。
- (3) 原正幸氏「音楽と自然―『源氏物語』の聴覚世界」(『川並総合研究所論叢』一号・聖徳大学・平成五年)。
- (4) 井上正氏「『源氏物語』の音楽思想―琴と和琴について―」(『帝京大学文学

学部教育学科紀要』三六号・帝京大学・平成三年)。

(5) 室城秀之氏『うつつは物語 全 改訂版』(おうふう・平成七年一〇月)。

(6) 小町谷照彦氏校注『新編日本古典文学大系七・拾遺和歌集』(岩波書店・平成二年一月) 二二九頁。

(7) ここには記されていないが、「姫君に琵琶、若君に箏の御琴を」(『橋姫』の巻・一二四頁)とある。

(8) ただ、(10)は、「どのような風力が加わったら……」とするものであるから、この「風」が、松風を想定している可能性は大いにある。

(9) 「引き立たせる」という意の語の「もてはやす」は、「楽の音が主体で、それに自然の音が合わせているもの」には三例(3)・(4)・(10)見られるが、「自然の音が主体で、それに楽の音が合わせているもの」には見られない。これも、音楽の優位性を高める裏付けとなりうるのではあるまいか。

*『源氏物語』本文の引用は、すべて、阿部秋生氏・秋山虔氏・今井源衛氏・鈴木日出男氏編『新編日本古典文学全集二〇・源氏物語』全六巻(小学館・平成六年三月〜平成十年四月)に拠った。

*本論文は、白百合女子大学大学院の研究発表会にて発表した研究を発展させ、その成果をまとめたものです。本論文を作成するにあたり、大変親身な御指導を賜りました室城秀之教授をはじめ、貴重なご助言を賜りました方々に、心より御礼申し上げます。